

## 「人間を殺傷しうる人間」の問題 ～イニシエーションの本質と宗教的暴力～

5

1984年、ヨーガを修習する団体として発足したオウム真理教。オウムの内部では、「イニシエーション」と称される一連の修行の階梯が組み上げられたが、いつしかその教団は、大量破壊兵器の使用さえ辞さない過激な殺人集団へと変貌していた。オウム真理教における教義や修行の体系と、結果として発現した暴力性のあいだには、何らかの内的関係が存在したのだろうか。

10

本発表では、宗教学で論じられてきたイニシエーションという概念を「軍事訓練」という見地から再考することにより、オウム事件の隠された一背景に光を当てることを試みる。

### 1. 宗教学とオウム真理教の共鳴

15

・1995年3月に地下鉄サリン事件が発生し、それがオウム真理教の手によるものであることが判明して以降、何人かの日本の宗教学者たちは、同教団に対して肯定的な見解を表明していたことから、厳しくその責任を問われた。宗教学者によるオウムの容認や肯定とは、彼らが教団の実態を正しく把握していなかったという、単なる不注意から生じたものに過ぎなかったのだろうか。あるいは両者のあいだには、それ以上の根深い関係が存在していたのだろうか。

→私の考えでは、答えは後者。特に、20世紀の宗教学において重視された「イニシエーション」という概念に、その要因の一つがあったのではないか。

25

#### 麻原彰晃と対談した際の島田裕巳の言葉(1991年11月・気象大学校)

オウムの信者の方はかなり若いと思うんですけども、今の若い人たちというのは、今徳とおっしゃったけれども、物質的には豊かでありつつ、なんかこれでいいのかというふうに思っていると。ところが、物質的には豊かであっても、体験というのか、人生で、ありのままの自分を見つめ、それとぶつかり合うような体験をしないまま大きくなっていると。イニシエーションという言葉は、反面では大人になるという意味だと思うんですけども、今の若い人は大人になるための自覚が少ない。ものを見るときにも、大人の目として見るのではなくて、子供の目として見ていて、自分というものをどこかに預けて、それによって救われようとする。今、精神世界ブームということで、チャネリングとか、自己開発セミナーだとかはやっていますけれども、そういうものの中にはまっちゃって、はまった状態で満足している。自立していないというか、そういう傾向がかなりあるのではないかと思うんですね。オウム真理教の方々も、最初の段階ではそちら側の若い人一般みたいな傾向を持ちながら、あるときに、何かふとしたきっかけでオウム真理教にぶち当たるといふ経緯をたどってきているような気がするんですけども。(麻原1992:231-2)

40

### 2. 島田裕巳『イニシエーションとしての宗教学』(1993)再読

・東京大学に入学した頃の島田は、ドライな性格の若者の一人であり、大学で行われるほとんどの講義に関心を持つことができず、出席状況も芳しくなかった。とはいえ彼にとつ

て、宗教学者の柳川啓一による講義は例外的であった。そこで柳川は、イニシエーションという概念を基軸に据えながら、さまざまな宗教体験について論じていた。高校時代、新左翼系セクトからの勧誘（オルグ）により、同級生の人格が急激に変容するという現象を目にしたことがあった島田は、イニシエーションという概念を用いれば、そのメカニズムを解明することができるかもしれないと考えた。

5

#### 柳川のイニシエーション講義

・人類学者のヘネップは、『通過儀礼』（1909）という書物において、出生・成人・結婚・葬式など、人生の節目となる時期に行われる諸儀礼に注目し、それらが「分離」「移行」「結合」という三つの段階から構成されていることを指摘した。そして彼は、子どもが成人を迎えて特定の年齢階級や秘密結社に加入する際の儀礼、すなわち「イニシエーション（「加入礼」や「入社式」と訳される）」を、通過儀礼の典型例の一つと見なした。

10

・宗教学者のエリアーデは、『生と再生』（1958）において、世界各地に見られるイニシエーションの儀礼を幅広く渉猟し、それらを比較分析した。彼によればその特徴は、若者に対して、一人で猛獣狩りに行かせる、歯を抜く、割礼を施す、互いに格闘させる、険しい山に登らせるなど、一連の厳しい試練を課す点にある。こうして若者は、いったん「死」の状態に落とされ、試練を乗り越えて「再生」を果たすことにより、成人としての第二の誕生を迎えるのである。エリアーデは、ヘネップが示した通過儀礼の図式を、象徴的な「死と再生」の過程として描き直したのであった。

15

20

#### 山岸会への参画

・当時の宗教学研究室における学問は、さまざまな理論の吸収にとどまるものではなかった。イニシエーションとは何より、さまざまな試練を自ら体験することにあると捉えられていたため、宗教の本質を理解するには、宗教学者もまた運動の渦中に「もぐりこみ」、試練を乗り越える必要があると考えられた。その影響から、中沢新一はネパールでのチベット密教の修行に身を投じ、島田は山岸会というコミュニオンに参画することになる。

25

・山岸会の活動は、農業や養鶏を主体としているが、その究極的な目標は、「無所有一体」の境地を実現することにより、ユートピア的世界を地上に実現することに置かれていた。そして島田は、同会において三泊四日の日程で行われた「特講（特別講習研鑽会）」に参加し、自己の人格が変容するという体験をする。

30

・山岸会における島田の活動は長続きせず、約7ヶ月でコミュニオンから離脱したが、特講での体験は、彼にとって重要な契機となった。島田は、山岸会での生活を自身にとってのイニシエーション＝大人になるための試練として捉え、その体験をベースとしたコミュニオン論を著すことにより、修士号を取得した。またその後、一人の宗教学者として、大学に専任の職を得ることもできた。

35

→とはいえ、同書公刊の直後、島田の人生は急激に暗転する。オウム真理教における過激な修行や出家生活を目にした島田は、イニシエーションを中心とする自らの宗教観に基づいてその活動を肯定的に評価し、地下鉄サリン事件以降、宗教学者としての見識を問われることになったからである。同書の文庫版（『私の宗教入門』2008）のあとがきでは、「私は、本書の原本を書いた時点で、イニシエーションの本当の意味を理解してはいなかった」（島田2008:272-3）と記す。

40

45

### 3. 現代の軍事訓練における人格改造の手法

——グロスマン『戦争における「人殺し」の心理学』

・同書のベースを形作っている認識とは、十分な訓練を受けていない兵士は、戦場においてほとんど敵を殺傷することができないという事実である。周知のように第二次世界大戦 5  
においては、多くの若者が練度の低い状態で戦場に駆り出されたが、彼らのなかで敵に向  
かって発砲することができた者は、平均して 15～20%程度に過ぎなかった。その大半は、  
故意に的を外した威嚇射撃を繰り返すに留まったのである。

人はなぜ、同類を殺すことに強い抵抗感を覚えるのか。その確固とした理由は明らかで 10  
はないが、そうした感覚が、「本能的、理性的、環境的、遺伝的、文化的、社会的要因の  
強力な組み合わせの結果として存在することもまちがいない」（グロスマン 2004:96-7）。

→ゆえに米軍は、その後の朝鮮戦争、ベトナム戦争を通じて、兵士の発砲率を上げるため 15  
の研究に取り組んだ。

#### 伝統的手法——徹底的な「しごき」

・入隊したての新兵は、サディスティックな罵倒の嵐に見舞われ、些細な過失に対しても、  
過酷な身体的懲罰を課される。また多くの軍隊では、ボクシングや棒を使った殴り合いな  
ど、各種の荒々しい格闘を行うことが、新兵の「通過儀礼」として定められている。実際 20  
の戦場は、「憎悪の嵐」と称されるような高度のストレス状況が常態化した世界であり、  
ゆえに新兵に対しては、その基本的なストレス耐性を向上させることが、軍事訓練におけ  
る最初の課題となる。

#### 社会心理学や動物行動学の応用

・米軍ではさらに、スタンレー・ミルグラム、コンラート・ローレンツ、エーリッヒ・フ 25  
ロム等が提示した諸理論や実験結果に依拠した訓練方法が開発された。

##### (1) 権威者の要求

戦場で兵士が敵に向かって発砲する最大の理由は、「撃たないと撃たれるから」という 30  
ものではなく、実際には、「撃てと命令されるから」である。断固たる意志を備えた指揮  
官の存在は、戦場においてきわめて重要であり、兵士たちはそのような人物に対して自ら  
の行動の決定権を全面的に委ね、彼の命令一下、発砲に踏み切ることになる。

##### (2) 集団免責

戦闘部隊では、集団への一体化や同一化がとりわけ強固に成立し、その絆はときに、家 35  
族よりも強いものとなる。兵士たちは、仲間を守らなければならないという義務感や、仲  
間とのあいだの相互監視に促され、敵への発砲を行う。

##### (3) 犠牲者との総合的距離

敵を殺傷するためには、犠牲者との距離を取ることに、すなわ 40  
ち、敵を自分と同じ人間とは見なさないことが重要である。具  
体的には、人種的・民族的な違いを強調することにより、「敵  
は畜生以下だ」という意識を植え付ける、自軍の倫理的優越性  
と制裁の正当性を固く信じ込ませる、テレビ画面や暗視装置などの機械的な緩衝物を介在  
させ、犠牲者が人間であることを意識させないようにする、といった方法がある。 45



## 殺傷の快樂とPTSD

・軍事訓練の様式を全面的に見直した結果、ベトナム戦争時の米軍兵士の発砲率は、95%にまで上昇した。

基礎教練キャンプの目的は、新兵のそれまでの考えかたや信念をすべて土台から突き崩し、5市民としての価値観を突き崩し、自己イメージを変化させること——すなわち、完全に軍隊組織に従属させることである。(グロスマン2004:483)

・殺人に対する本能的抵抗感を克服し、その行為に現実に手を染めたとき、人はどのような感覚を覚えるのか。何人かの兵士が躊躇いながら告白した内容によると、意外にもそれは、ときに圧倒的なカタルシスや多幸感をもたらされる、というものであった。その快感は、セックスにおける快感と同類、あるいはそれを何倍にも増幅したようなものであり、人はその際に、絶対的自由の感覚や、至高の全能感に浸されることになる。

・とはいえ、そうした快感は一瞬で過ぎ去り、その後兵士は、極度の疲労、錯乱、妄想、15人格の解離、性格の著しい変貌など、PTSDにまつわる諸症状に苦しめられることになる。

これまでの戦争の歴史においては、兵士を日常に復帰させる「通過儀礼」として、同輩や上官による殺害行為の正当化、戦場から時間を掛けて帰還することによる冷却期間の確保、帰国した際の凱旋パレード、記念建造物の創設、数々の受勲等が存在していたが、ベトナム戦争時には反戦運動が盛り上がっていたため、帰国した兵士たちはPTSDを悪化させ、ドラッグやアルコール依存に陥っていった。

## 4. 未開社会（前国家的社会）における戦士の育成

・イニシエーションの基本的役割とは、成長して十分な体力が備わった若者に対して、いざというときに敵を殺傷するための方法を教えること、また、それに耐えうるような人格的・精神的変容をもたらすことにあつたのではないか。

### ヘネップにおける軍事的イニシエーション

・『通過儀礼』においてヘネップは、ポリネシア・タヒチ島の「アリオイ」結社を取り上げる。アリオイとは、政治・戦争・略奪を目的とした結社であり、その組織は七つの階級に分かれ、各成員が属する階級は、身体に刻み込まれた入れ墨によって識別される。アリオイのイニシエーションは、名前の変更、新米による自分の子どもの「殺害」（詳細は不明）、聖歌の修得、酋長の妻の衣服の奪取、といった一連の手続きによって進められる。こうした儀礼は階級が上がるたびに繰り返され、その際には、聖なる豚を全員で共食する、35性や食物に関する日常的なタブーを侵犯する、といった事柄が行われる。

### エリアーデが描く「ベルゼルカー」

・エリアーデは『生と再生』において、北欧神話に登場する「ベルゼルカー（凶暴戦士）」の形象を皮切りに、世界中に見られる軍事的イニシエーションの様相について考察している。ベルゼルカーとは、字義通りには「熊の皮をつけた戦士」を意味し、エリアーデによれば、彼は呪術的な力によって熊と融合した状態にある。若者は、数々の壮烈な試練をイニシエーションとして乗り越えることにより、初めて勇猛な戦士に変容することができるのである。



・戦士となった若者は、ときに周囲を戦慄させるような狂暴的発作を露わにする。彼は極度に激昂し、その内面は、抗しがたい気迫と戦闘力によって満たされる。エリアーデによればその力は、シャーマンが操る「聖なる力」や「呪的灼熱」と同種のものであり、ヒンドゥー教のタントラ派のテキストはそれを「クンダリーナの燃焼」と表現する。戦士とシャーマンのイニシエーションは、それぞれ異なる道を辿ってはいるが、そこで追求される目的は、基本的に同一である。すなわち、それまでは俗的存在であった修練者をいったん死なせ、その後、一個の新しい超人的存在として復活させることである。 5

軍事的イニシエーションでは、イニシエーション的死は、シャーマンの入巫儀礼に見られるほどはっきりしてはいない。若き戦士の主要な苦行はまさにその敵に打ち克つことであるからだ。しかし彼は燃え上がり、狂暴戦士の激怒——俗人の状態に死せることをあらかず徴候に達して始めて試練から勝利者として起ちあらわれるのである。魔的燃焼を得るものは、あきらかに彼が超人間界に属することをしめす。 (エリアーデ1971:180) 10

#### ピエール・クラストルによる未開社会の戦争論——「国家に抗する社会」 15

・南米での豊富なフィールドワークの経験を有するクラストルは、未開社会の諸部族に見られるイニシエーションの有り様を、端的に「拷問」と表現する。北米インディアンのマンドン族の儀礼において若者は、四日間の断食と三夜の不眠を課された後、身体に穴を穿たれ、宙吊りにされ、肉を引き裂かれなければならない。南米のグアヤキ族では、若者が失神してしまうまで、彼の背中全体に傷をつけ続ける。ムバヤグアイクル族において、戦士の階級に加入する若者は、鋭く尖らせたジャガーの牙を、男根やその他の部位に突き刺すことを求められる。 20

・イニシエーションを通じて社会は、若者の身体に対し、共同体の精神や歴史的記憶、さらには、法そのものを刻み込む。彼はそれにより、部族の尊厳と自由を賭けて闘う一人の戦士へと成長するのである。 25

・クラストルは同時に、未開社会＝前国家的社会における法や戦争が、国家的社会におけるそれとは根本的に異なることを強調する。すなわち、国家において法とは基本的に、支配者から被支配者へと課せられるものであり、それは多くの人間たちにとって外在的である。また、国家による戦争は、他の国家や社会を服従させるために行われ、ゆえに戦争に敗れた側は、暴力を行使する権利を剥奪されることになる。 30

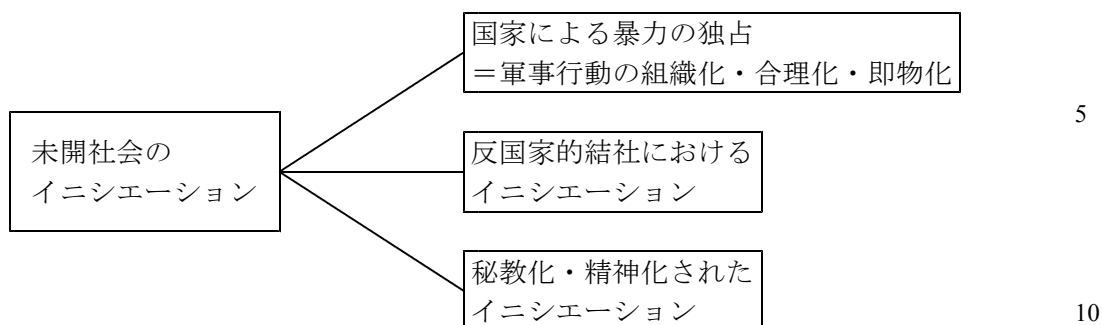
これに対して、未開社会においては、社会の階級分化や機能分化が未だ明確には形成されていない。そこには、支配者と被支配者の区別はなく、法は上から課されるというより、諸儀礼を通じて個々の成員の身体に刻み込まれる。それは諸個人にとって内在的であり、共同体の「自律（オートノミー）」の原理として機能するのである。そして未開社会における戦争は、他者を完全に征圧し、服従させるために行われるのではない。それは、個々の共同体の誇りと固有性を維持するためにこそ行われるのである。 35

#### 未開社会のイニシエーションの特質 40

- 1) 共同体の神や祖霊との交流、神話的な死生観・世界観の教示という側面が含まれる。
- 2) 敵を非人間化するばかりではなく、ときに自らが非人間的存在に変容する。
- 3) 軍事全体が、歌謡・舞踏・身体装飾など、文化芸術的・遊戯的側面を兼ね備える。
- 4) 軍事行動が十分に組織化されておらず、各戦士は、自らの意志と尊厳に基づいて戦う。

45

## 5. イニシエーションの歴史的変容



### マフィアにおけるイニシエーション

・まず加入者は、「血の掟」と呼ばれる、組織において厳守すべきルールについて説明される。それは、いかなるときも仲間を守れ、他の男のものである女を望むな、組織の秘密を外に漏らすな、といった内容である。続いて加入者は、参列者の前で自分のボスとなる人物を選ぶ。すると代理人は、銃を撃つ際の利き手を彼に尋ね、その手に針を刺し、マフィアの守護聖人である聖母の絵の上に血を垂らす。加入者が決して組織を裏切らないという誓いの言葉を口にしてあるあいだ、聖なる絵に火が付けられ、メンバーの手から手へと回される。その儀礼は、彼らが血の絆で結ばれたことを意味すると同時に、組織を抜けようとすれば、加入者の血が流されるということを暗示する。

→反国家的結社の多くでは、メンバーたちが「ファミリー」や「ブラザー」といった疑似的家族関係を示す強い絆で結ばれること、組織の掟が一般社会の法に優越すること、組織の理念や利益のためであれば暴力も辞さないこと、などが取り決められる。

### オウム真理教との類似性が認められる歴史的結社

#### (1) イスマーイール派の「暗殺団 (アサシーニー)」

イスマーイール派とは、9世紀頃、シーア派から分裂することによって成立したイスラム教の一派である。そのなかのニザール派は、イラン北部アラムート渓谷に築かれた城砦を拠点とし、「山の長老」と呼ばれる指導者を頂点とする階級組織を作り上げた。同派への入団を許され、階級を上ってゆくためには、数々のイニシエーションを乗り越え、教義の秘奥に通じることが求められた。

イスマーイール派の教義は、古代末期の秘教グノーシス主義から影響を受けたと思われる二元論をその特色とし、さらにニザール派はそうした世界観をもとに、教団に敵対する人物を次々に暗殺したことで知られる。さまざまな伝承によれば、「山の長老」は若者たちを大麻 (ハシーシ) を使って操作し、数々の暗殺を遂行させたという。こうしてニザール派は、「暗殺団 (アサシーニー)」と通称されるようになった。

#### (2) 白蓮教

白蓮教とは、南宋王朝初期の僧、茅子元ぼうしげんが創始した、「白蓮宗」に由来する民間宗教の総称である。茅子元は、念仏等の修養を通して自己の内なる弥陀ほんしやうみだ (本性弥陀) を発見すべきことを説いた。こうした信仰に、シルクロードを渡って伝えられたマニ教に基づく二元論が付加され、現在の世界は闇の原理の支配によって汚辱されており、遠からず破局を迎え、その後本来的な光の世界が回復されるという歴史観・終末論が形成された。茅子元の白蓮宗そのものは、まもなく異端として排除されたが、その理念は清代に至るまでさ

さまざまな形で継承され、多くの宗教結社を生んだ。それらは研究者のあいだで「白蓮教系民間宗教」と称されている。

白蓮教系の結社は、闇の世界の終焉を受動的に待っていたわけではなく、しばしば武装蜂起し、自らの手で現体制を打倒しようとした。白蓮教の反乱は清代まで幾度も繰り返されたが、その代表例の一つに、元末に起こった「紅巾の乱」がある。この動乱では、<sup>5</sup>「明王」<sup>みょうおう</sup>を名乗る多くのメシア的人物が現れ、最終的には朱元璋が覇権を掌握し、元を打倒して明を創始することになった。

### (3) フリーメーソン・神智学協会

近代における自由主義的結社の一つであるフリーメーソンでは、秘教的・精神的イニシエーションの形式が著しく発達した。地域によって差が見られるものの、フリーメーソンには、「マスター」を中心とする階級組織と、「ヒラム・アビフ」の神話に基づくイニシエーションが設定されている。同組織によれば、ヒラム・アビフとはソロモン神殿の建設責任者であり、メーソンの秘密を守るために殺害され、その後復活を遂げたという。

フリーメーソンが普及すると、それに倣ったいくつもの秘教的・オカルト的結社が登場した。ロシアの霊媒ブラヴァツキー夫人は、古今東西の宗教思想を融合させた教義を作り上げ、一八七五年に神智学協会を設立した。同会ではフリーメーソンと同様、「マスター（大師）」を中心とする階級組織が構想されたが、そこにおいてマスターは、地球全体を統治する霊的・超人的存在へと格上げされている。ブラヴァツキーの書物『シークレット・ドクトリン』によれば、人間の霊魂は宇宙的進化の途上にあり、人はマスターから隠された真理を教示されることにより、速やかに霊性のレベルを向上させることができるのである。1879年、神智学協会の本部がインドに移転したことを切っ掛けに、同会はヒンドゥー教からの影響を色濃く被り、そのイニシエーションにおいては、特にクンダリーニー・ヨーガの技法が重視された。

25

## 6. 軍事訓練と化したオウムの「イニシエーション」

・オウム真理教は、1984年、ヨーガを修習する団体として発足したが、次第にそれは、グルである麻原の意志に基づいて殺害を遂行する「破壊的カルト」と化していった。その過程を簡単に振り返ると、以下の通り。

30

・初期のオウムにおいては、麻原が信者に施す「シャクティパット」という技法が重視された。それにより信者は、「クンダリーニーの覚醒」に成功し、「超人類」に至る道を歩み始めることになった。またこの技法によって、麻原の教祖化・神格化が進められていった。

35

・オウムは88年に富士山総本部道場の建設を計画し、そのために資金を調達し始めたが、その際に100万円以上を献金した信者に対しては、「血のイニシエーション」が施された。すなわちそれは、麻原の血を溶かした液体を飲むという儀礼であり、信者の霊性を向上させると同時に、麻原と信者の一体感を高めるために行われたと考えられる。

40

・しかし一般社会は、これを猟奇的なものに見なして激しく反発、オウムへのバッシングや反対運動が繰り返される。結果としてその騒動が、坂本弁護士一家殺害事件に結びついていった。これに対して麻原は、こうした殺害行為を「ポア（魂の移転）」というチベット密教の用語で呼び、救済のために不可欠な行為であると正当化した。

45

・90年に「真理党」を結成して衆議院総選挙に立候補し、手酷い敗北を喫した後、オウムは本格的な武装闘争路線に転換してゆく。生物化学兵器を含む兵器類の開発に着手。

・93年以降は、多くの信者たちに対して、彼らを真理のために闘う「戦士」として育成するためのイニシエーションが施されていった。すなわち、麻原の脳波をそのまま移植することを謳った「パーフェクト・サーベーション・イニシエーション」、人が死亡するシーンを集めた映像を見せ続ける「バルドーの導き」、LSDの入った溶液を飲み、迅速に神秘的現象を体験させる「キリストのイニシエーション」等である。その活動の末期においては、三泊四日の日程での野外訓練、モデルガンを用いた武器の講義やサバイバル・ゲーム等、直接的な軍事訓練も行われた。 5 10

## 7. 結論——危険な概念を弄んだオウムと宗教学者

・これまでの長い人類史において、若者が自分の共同体を守るために戦う技法を修得するというイニシエーションの契機は、きわめて重要なものとして存在してきた。それは若者にとって、成人としての責任を課されると同時に、人間の生死とは何かということを実体的に考える機会を提供してきたのである。 15

・とはいえ、そうしたイニシエーションの様式は、国家による「暴力の独占」が進むことにより、次第に一般市民の手から奪われていった。さらに、第二次世界大戦の敗戦によって平和国家への道を選び、憲法上は国家による軍事力の行使さえ放棄した日本において、暴力性の剥奪というプロセスは、一つの極点に達したと見ることができる。 20

言うまでもなくそうした事態は、否定的にのみ捉えるべきことではない。しかしその影響として、若者が生と死のリアルな姿に向き合う機会が失われてきたということも、無視し得ない事実である。 25

・オウム真理教の活動をその根底で駆動させていたのは、「人が死ぬとはどういうことか」という、単純にして難解な問いであった。そして実はその同じ問いに、20世紀の宗教学もまた取り憑かれていた。結果的に両者は、イニシエーションという本来は危険な概念を不用意に弄び、それに対する厳しい報いを受けることになったのではないかと私には思われる。 30

### 【主要参考文献】

- 麻原彰晃 1992『自己を超えて神となれ！ 大人気を呼んだ尊師大学講演会特集』オウム出版。
- ピエール・クラストル 1987 渡辺公三訳『国家に抗する社会——政治人類学研究』書肆風の薔薇。 35
- ピエール・クラストル 2003 毬藻充訳『暴力の考古学——未開社会における戦争』現代企画室。
- ミルチャ・エリアーデ 1971 堀一郎訳『生と再生——イニシエーションの宗教的意義』東京大学出版会。
- ファン・ヘネップ 2012 綾部恒雄・綾部裕子訳『通過儀礼』岩波文庫。
- デーヴ・グロスマン 2004 安原和見訳『戦争における「人殺し」の心理学』ちくま学芸文庫。
- 岩村忍 1981『暗殺者教団——イスラム異端派の歴史』リポート。 40
- シルヴィオ・ピエルサンティ 2007 朝田今日子訳『イタリア・マフィア』ちくま新書。
- 島田裕巳 1993『イニシエーションとしての宗教学』ちくまライブラリー（2008『私の宗教入門』ちくま文庫として再刊）。
- 山田賢 1998『中国の秘密結社』講談社選書メチエ。
- 吉村正和 2010『図説 フリーメイソン』河出書房新社。 45